

「館主巡回日記」にみる井上円了の観光行動

国際地域学部国際観光学科教授

堀 雅通

[要旨]

井上円了は、その生涯に3,578日にも及ぶ全国巡回講演（巡講）を行い、その記録を簡潔な旅行日誌（巡講日誌）として公表している。巡講日誌は、当初、「館主巡回日記」として『哲学館講義録』などに収められていたが、大学を辞してからは『南船北馬集』として刊行された。巡講は前期と後期に分かれる。「館主巡回日記」は前期巡講の旅行日誌である。

円了は行く先々で様々な風物を見聞するが、心にとまった風景、関心をもった風物の印象や所感を巡講日誌に記している。旅行中、円了は、山紫水明に出会うことを最大の「楽しみ」とした。風景賛美が巡講日誌の特徴である。訪問地が温泉であれば、入浴を楽しんだ。そして、いずれの地にあっても、円了は多くの人々と語り、交流を深めた。こうした行為は「観光行動」といえる。本論は、そのような井上円了の観光行動を、特に前期巡講の旅行日誌「館主巡回日記」にさぐり、分析・考察したものである。

[キーワード]

井上円了、全国巡回講演、「館主巡回日記」、観光行動

[目次]

1. はじめに
2. 巡講の概要
3. 巡講の記録―「館主巡回日記」
4. 巡講にみる観光行動
5. むすび

1. はじめに

哲学館機関誌『天則』（明治23年10月17日号）に以下のような広告が掲載された。

「今般当館資金募集ニ付有志勧誘ノ為メ本月下旬ヨリ館主東海道筋へ出張・・・尚館主出張ハ一年間ニテ全国巡回ノ予定・・・一月ヨリ四国九州へ巡回、三月ヨリ中国筋、五月ヨリ北国筋、七月ヨリ奥羽北海道地方へノ巡回ノ筈ニ候也」

哲学館館主・井上円了による全国巡回講演（以下「全国巡講」または「巡講」）の広告である。併せて館主による以下の依頼文も掲載された。

「又学術教育宗教ニ関シ講義演説等御依頼ノ筋ハ小生応分ノ御助力可申候」

明治23年11月2日、広告通り、井上円了は、全国巡講を静岡県からスタートさせた。32歳のときである。

巡講の目的は、いうまでもなく、哲学館建設の資金募集にあった。が、むしろ、それはまさに当時日本の近代化を進めようとした円了の社会啓蒙活動、すなわち「修身協会運動」の最も重要な活動ともなっていた。本論は、そのような井上円了の巡講の日誌である「館主巡回日記」の中に、井上円了の観光行動をさぐる。

なるほど「館主巡回日記」は、巡講の日程や行程、天候、面会者や訪問箇所等について、これらをごく簡潔・事務的に記した日誌にすぎない。しかし、注意して読むと、巡講の最中、移動中、あるいは訪問地において、円了は、折に触れ、目にした風景や風物、あるいは名所・旧跡等の印象や所感を、さりげなく記している。訪問地が温泉であれば、入浴を楽しんだ。また、いずれの地にあっても、実に多くの人々と語り、交流を深めていたことがわかる。これらの行為は「観光」(行動)といえるだろう。

いうまでもなく、巡講は、社会教育者・井上円了の講演「旅行」であり、業務（ビジネス）「旅行」であった。が、円了自身にとっては、むしろ観光「旅行」としての意味合いが濃かった（といえる）。すなわち、巡講は、「兼観光旅行」だった。実際、多忙な巡講の合間にあっても、円了は、意図して「観光」を楽しんでいた節がある。その意味で、観光は、超人的ともいえる井上円了の全国巡講を側面から牽引した誘引力ともなっていた（と考える）。本論は、そのような井上円了の観光（行動）を（前期）巡講日誌である「館主巡回日記」の中に探る¹⁾。

2. 巡講の概要

明治22年6月22日、第1回目の海外視察旅行から帰国した円了は、哲学館の拡張・設立を決意し、その旨趣を社会に公表するとともに、新校舎の建設に着手した。同時に、そのための資金調達に奔走することとなった。哲学館創設の趣旨を説明し、教育・哲学・宗教、さらに海外事情等について講演し、全国の民衆から寄付金を募るという活動である。その背景には、勝海舟との邂逅、そして支援があった。

円了自身、「全国巡回講演」と称しているように、円了は（少なくとも）3,587日を要して全国の市町村を回った。また、当初から、それを目標としていた。

あしかけ28年に渡って続けられた巡講は前期と後期に分れる²⁾。前期は明治23年から明治38年までの15年間、後期は明治39年から大正8年までの13年間である。巡講を二期に分けるのは、明治39年の円了の哲学館大学からの引退である。これを機に、前期は哲学館創設との関係から、後期は修身教会運動および哲学堂創設との関係から巡講の目的が区分される。このことは、旅行日誌が、前期は「館主巡回日記」、後期は（当初は）「紀行」、（大正改元以降は）「巡講日誌」に改められたことからもうかがえる（後期巡講日誌は『南船北馬集』全16編として刊行される）。本論は、紙数の関係から、前期巡講日誌である「館主巡回日記」を中心に、井上円了の観光行動を考察する³⁾。

前期巡講の期間は、明治23年11月2日から明治38年9月4日までの13年間である。この間、円了は（判明しているだけでも）のべ966日を費やして全国を回っている。各地で演説・講演・講義を行い、哲学館への寄付金募集を行った。円了の巡講は、全国各地の国民・大衆に直接語りかけ、賛同を得、寄付を募るという点に最大の特徴があった。

「館主巡回日記」の初期の記述には、巡講の使命感、資金募集の義務感が強く漂う。もっとも「資金募集の件は赤松円純、菅野武次郎、伊藤小文司の三氏に委託し、朝八時、岡崎を去りて名古屋に向かふ」(12・14)といったように、資金募集の実務はもっぱら巡講関係者あるいは同行者に任せていたようで（も）ある。ともあれ、円了は、哲学館創設の理解と賛同を得るため、精力的に各地を回り、講演を行った。そして多くの関係者と交流を重ねた。このような事情から、当初の巡講日誌に、円了の観光（的）行動、観光（的）要素を窺うことはできない。

「町内議事堂において教育上の談話をなす・・・資金募集の件を依頼す・・・明性寺において演説会を開く・・・中学校に至り一席の談話をなす・・・哲学の講話をなす・・・右の諸氏に資金募集の件を託し・・・有志勧誘のことを依頼す・・・哲学館寄付金の件を依頼す。」(12・16～17)

巡講の訪問先は、寺院や教育機関が多い。学校は、小学校、中学校、師範学校である。その他、教育会、教育倶楽部、仏教青年会、実業青年会、婦人会、陸軍婦人会、慈善会、真宗講話会、村内有志、仏教同盟会、知徳婦人会、愛国護法教会、人類学会など、実に様々な会合に顔を出し、演説・講演を行っている。寺院は宗派に関係なく、当該寺院を講演会場、また宿泊所としても利用していた。

「師範学校に至り生徒諸氏に道徳上の講話をなし、町田校長の案内にて校内を巡観す・・・高等小学において臨時教育会の演説をなす・・・明源寺において教育上の談話をなす。当地教育会の依頼に応ずるなり・・・劇場において宗教上の講演を開く・・・茶会に出席し一席の談話をなす・・・師範学校に至り、本県教育会の依頼に応じ徳育上の談話をなす・・・夜

に入りて、師範学校生に対し学術上の講義をなす。』(12・35～38)「宝満寺において教育上の講義をなす。』(12・29)「宿所勝福寺なり。』(12・44)

面会者は教育関係者（小学校、中学校、師範学校、教育会）、宗教関係者（寺院、住職、仏教会など）、行政関係者（知事、参事官、警察署長など）が中心だが、明治23年11月10日～17日の愛知県ならびに岐阜県における巡講（表2参照）では、学校教員、町長、県会議員、大谷派別院、竜坊寺、新聞社員、学校掛員、郡長、高等小学校長、郡書記、知事、書記官、参事官、師範学校長、中学校長、県庶務課長、属官、教務取締所長、曹洞宗大光院、同万松寺、真言宗宝生院、軍医監、陸軍大尉、医学士、法雨協会、検事、中学教諭といったように実に多くの関係者と会っている⁴⁾。

講演の内容は、教育、宗教、哲学が中心だが、心理学、人類学などの講義もあった。「教員諸氏の依頼に応じて心理学の講義をなす。』(12・36)「宗泉寺に至り仏教演説をなす・・・当夜、青年会の依頼に応じて哲学の講義をなす・・・午後、小学校において学術演説をなす・・・夜に入りて会員の懇親会あり。』(12・45～46)「夜に入りて曹洞宗寺院においてインド哲学の講話をなす。』(12・50)「商業と哲学との関係について一席の演説をなし、終はりて懇親会あり。』(12・69)「皇典講究所において人類学に関する一席の演説をなす。』(12・31)「中学講堂において女子教育の必要を論ず。婦人会員の依頼に応ずるなり。続きて、婦人会員に対し一席の談話をなす。』(12・34)

「館主巡回日記」は、巡講地域（県等行政単位）別に編纂されているが、巡講自体は連続して行なわれた。例えば、静岡県（第1回）、愛知県（第1回）、岐阜県、滋賀県、三重県、愛知県（第2回）は、明治23年11月2日から12月15日までである。このため、円了は、一旦、巡講に出ると、一ヶ月、二ヶ月、ときには数ヶ月もの間、自宅に戻れないこともあったという。

3. 巡講の記録一「館主巡回日記」

前期巡講の日誌は「館主巡回日記」として公表された。「館主巡回日記」は、哲学館関係者、特に寄付金を募った人々、すなわち哲学館創設賛同者に対する報告を兼ねていたことから『哲学館講義録』など哲学館機関誌に順次掲載されていった。ちなみに、前期巡講の第一日目は、次のような書き出しで始まる。「明治二十三年十一月二日（日曜） 晴れ。朝九時、新橋発車。大磯町教育会に出席し、教育上の講話をなせり。』(12・11)

「巡回日記」には、旅行の日付、天候、訪問地、行程、面会者の氏名が簡潔に記され、目的も明確だった。「五日 雨。朝、県庁へ出頭し、知事、書記官、参事官、学務課長等に面会す。午後、蜂屋師範学校長の依頼に応じ同校へ出頭し、教育将来の方針ならびに哲学館拡張の趣意を演説す。聴衆は県官、教員、生徒なり。その夜、南莊乗海、森本大太郎二氏、その他二、三の有志の依頼に応じ、市中敬覚寺において学術上の演説をなす。当日、市長星野鉄太郎氏を訪問す。』(12・11)

「館主巡回日記」には講演で世話になった人々に対する気遣いが滲む。「当日この地にありて面会したるもの・・・また、当地にて周旋の労をとられたる者は左の諸氏なり。」(12・17)「今回巡回中、各地の有志者より一方ならず周旋尽力にあずかり、いちいちご厚意を謝するはずなるも、ご姓名を失念して意を達するあたはざるものこれあり、また右日記中に記載せざるものおよび記載中順次を失するものこれあり、疎漏の罪、深く謝するところなり。」(12・26)

「館主巡回日記」の記述は記録的、客観的を旨とした。したがって、そこに円了個人の日常や心情などは記されていない⁵⁾。ところが、観光関係の事柄になると、当初は控えめで目立たなかった記述も、前期巡講の後半（明治35年）辺りから、かなり大胆、率直な感想や所感が記されるようになる。例えば、明治24年2月14日の「弘法大師墳墓に詣し・・・金堂に詣し・・・朝、和歌浦を見物」(12・30)といった（抑制的な）記述は、明治35年6月26日～7月5日、8月27日になると、次のように（解放的に）様変わりする。「演説後、真宗中興大師の遺跡をたずね敬慕の情にたへず。山上風景ことに佳なり。・・・海上を渡り亀島を巡り・・・海上眺望すこぶるよし。・・・午前十時、小舟に駕し海上四里、いはゆる越前岬を巡りて四ヶ浦村に着す。風穏晴、風景絶佳、舟中知らず快哉と呼ばしむ。」(12・162～163)

ここには、巡講の最中、思わず遭遇した絶景に感嘆の声を上げ、素直に喜びを表わす旅行者・円了の姿があった。このような風景賛美の感情表出は、その後の円了旅行日誌（旅行記）にしばしば見られるようになる。

4. 巡講にみる観光行動

「館主巡回日記」には、既述したように、当初（明治23年～25年）、観光行動の記述はほとんど見られず、もっぱら巡講の内容を事務的に記しているだけだった。とはいえ、巡講が講演「旅行」である以上、自ずと観光（旅行）の要素が加わってくる。明治33年7月の「能州巡回日記」以降、「館主巡回日記」には観光的要素が色濃く表出するようになる。それは、「途中、風景絶佳なり。」(12・101)、「能州第一の名勝たる九十九湾を遊覧す。」(12・103)「沿岸の風光すこぶる佳なり。」(12・120) といった風景賛美の表現にみてとれる⁶⁾。

巡講は、午前中は移動、午後の時間を講演や面会に充て、夜は、たいてい「懇親会」に出席していた（但し、夜でも講演を行うことがしばしばあった）。したがって、観光の機会はその合間にあった。巡講関係者から当地の名所・旧跡あるいは景勝地を案内してもらうこともあったろう。

巡講は多忙を極めたが、たとえ「館主巡回日記」に記載がなくても、(学生時代の旅行記『漫遊記』などからもわかるように) 円了は観光的な行動を忘れることがなかった。円了は行く先々で観光を楽しんでいた節がある。というよりも巡講の目的は観光にあったのではないかとさえ思われる。「今度の巡回は文人的漫遊にあらず、保養的旅行にあらず、哲学館および京北中学拡張の旨趣を報告し広く賛成会員を募集するにあり。」(12・107) ということは、ふだ

んは漫遊的・保養的旅行が多かったのではないか。能登巡講の折にも、「余は巡回中に別に七不思議および八景と名づくべきものを得たれば、他日の笑い草までに左に掲ぐ」(12・108)として、旅行中の興味ある見聞の一端を紹介している。さらに、円了は、教員たるもの、教育上、積極的に旅行をすべきであると説いている。「教員たるもの村民に代はりて、暑中休暇の間はもつぱら旅行をつとめ、三府はもちろん、各地の実況を見聞し、自ら有為進取の気風を養ひ、その結果を児童の脳漿に注入するをよしとす。」(12・133)

4.1 巡講の行程—交通利用

巡講の起点は自宅のある東京である。明治20年代になると鉄道の整備もかなり進み、円了も鉄道を積極的に利用するようになった。鉄道利用に際しては、移動中、車窓からの風景を楽しんでいたはずだが、当初の巡講日誌に、そのような記述はない。出発地、到着地、訪問地、施設、宿所等が事務的、簡潔に記されているだけである。

巡講に際し、効率的な移動を心がけた円了は、交通の利用には常に気を払っていた。円了の移動方法は、まず目的地にできるだけ速く（効率的に）到着する。その際、鉄道と汽船が拠点間直行の役割を果たした。鉄道には（自宅のある）東京（新橋・上野）を起点として乗車、目的地（拠点駅）へ直行、降車し、そこを再び起点に各地の講演会場を（鉄道・汽船以外の二次的）交通機関（馬車、人力車、小舟、徒歩）を用いて回った。

4.2 社寺参詣

円了は、訪問地において、折に触れ、当地の神社仏閣を小まめに参詣している。すなわち、巡講に際し、まず訪ねるのが神社仏閣だった。このような習慣は学生時代から続いている。

「松阪を去りて山田（伊勢市）に至る。ただちに太廟を参拝し」(12・21)「弘法大師墳墓に詣し・・・金堂に詣し」(12・30)「琴平町に至り、虎屋に憩ひ、神社に詣し、社務所を訪ひ」(12・37)「(出雲) 大社に参詣し」(12・46)「演説後、上杉神社に詣す。」(12・51)

「厳島に至り・・・社務所を訪ひ・・・饒津神社に詣し」(12・55～56)「まず八幡神社に詣し」(12・60)「地藏尊に詣して」(12・66)「大宰府天神に巡詣し」(12・90)「篠山神社を巡拝して帰館す。」(12・91)

「曹洞宗大本山たる総持寺に詣し・・・本誓寺に移る。」(12・104～105)「神社に詣して宝物を参観す。」(12・120)「滝川神社に参拝す。」(12・124)「内外両宮を参拝」(12・126)「大谷派別院および藤島神社を参拝」(12・161)。

4.3 名所・旧跡・風物・景勝地

「館主巡回日記」には、巡講の折、訪問地で案内された名所・旧跡の記述が散見される。これらは自ら訪ねたところもあろうが、多くは当地の巡講関係者の紹介や案内によるものだ

と考えられる。とはいえ、巡講の合間、好奇心旺盛な円了は、実に多くの事物に関心を寄せ、その所感を興味深く記している。

「港内築港の実況を一見」(12・90)。「朝、灯台を一覧し」(12・123)。「製塩場を一覧」(12・149)。「捕鯨あり・・・(浜に)出でて鯨魚の解剖を見る。午後また捕鯨あり。その状、実に一大奇観たり。」(12・86)。「製糸場を巡見す。」(12・51)。「天然ガス点火を一見し」(12・67)。「農園に至り実地演習を見る。帰路、博物館を一見す。」(12・76)。「蜜柑山を一覧す。」(12・116)。「当所の梅林を遊覧」(12・124)。「午前、楽々園に遊び、城址に登り、金亀教校をたずぬ。」(12・17)

「後樂園を巡観」(12・55)。「朝、和歌浦を見物」(12・30)。「朝、鳴門海峡を渡り淡路福良港に着す。」(12・39)。「朝、天橋(立)を経て峰山町に至る。」(12・42)。「午前、錦帯橋を見物し」(12・61)。「当村に真宗宗祖繫樞の旧跡あればこれに詣す」(12・66)。「午後、(熊本)城内を参観し」(12・88)。「箱崎八幡に詣し、名島に渡り神功皇后三韓討に用ひたる船檣の化石したるものを見る。」(12・90)

「潮岬灯台および神社を一覧し」(12・119)。「円山に登り大伴家持卿の記念碑を拝観す。」(12・144)。「大石神社および花岳寺には四十七士の像および墓あり。」(12・149)。「門内にみかえりの松あり。横臥十丈、一顧するに足る。」(12・152)。「演説後、真宗中興大師の遺跡をたずね敬慕の情にたへず。」(12・162)。「熊沢蕃山先生の墓に詣す。」(12・182)

4.4 風景賛美

風景賛美は円了旅行日誌・旅行記の特徴の一つとあってよい。円了は、旅行中、山紫水明に出会うことを最大の「楽しみ」とした。伝統的な名所・景勝も自らその美を確認した。

「朝、小舟に乗じて辛島、麦島の奇景を巡見し」(12・48)。「途中、風景絶佳なり。」(12・101)。「能州第一の名勝たる九十九湾を一覧す。」(12・103)。「沿岸の風光すこぶる佳なり・・・西岸の奇石怪岩、往々人目を驚かすものあり。」(12・120)。「兩岸の風致おのずから仙源に遊ぶ思ひをなす。」(12・120)

「海上の風景すこぶる佳なり。」(12・137)。「橋上、黒部川の眺望絶佳なり」(12・141)。「海山の眺望ことに佳なり。」(12・144)。「山上の風光秀逸なり。」(12・144)。「堂側眺望すこぶるよし。」(12・147)。「演説後、当所の名勝を巡見す。」(12・158)。「山上風景ことに佳なり。」(12・162)。「海上眺望すこぶるよし。」(12・163)。「風穏晴、風景絶佳、舟中知らず快哉と呼ばしむ。」(12・163)。「これを虹の松原と称す。その風景の秀霊なる、須磨、舞子の比にあらず。拙作をもつてその斑を叙す。」(12・174)。「暑熱のうちに景勝を求めて肥前の地に入る。」(12・176)

4.5 温泉

円了は若いときから温泉浴を楽しんだ。学生時代は、熱海、箱根の温泉によく行った。巡

講の疲れも温泉で癒した。巡講日誌には温泉保養の記述が散見される。

「道後温泉に遊び入浴す。」(12・35)「斎藤氏とともに勝田楼に至り鉱泉に浴す。」(12・73)「演説後、湯之峰温泉に入浴して帰る。同所には小栗判官、遊行上人の古跡」(12・120)があった。「東郷温泉養生亭に休憩し」(12・44)「終日旅亭にありて宇和島行きを待つ。当所に温泉あり」(12・36)。温泉に入ったかどうか分からないが、温泉好きの円了の本音が窺える。

「湯沢温泉において懇親会あり、かつ、これに浴宿す。」(12・62)「湯本温泉に浴す。温泉に礼湯、恩湯の二種あり」(12・85)「当夕、栗津嘉宮楼に宿す。温泉場なり。」(12・154)「山中村に移る。加州第一の温泉場なり。」(12・158)「豆州熱海の温泉に浴す。滞留、週余に及ぶ。」(12・171)

4.6 交遊・交流

円了は、巡講中、様々な人々と交流する。教育、寺院関係者が中心だが、教え子はもちろんのこと、哲学館（大学）関係者との交流が楽しみとなった。出身者が（中央よりも）地方でそれぞれ活躍している姿を見るのが喜びだった。彼らもまた円了の巡講に献身的に尽くした。それが心の支えとなった。「旧（哲学）館内員、館外員の各地に散在するもの、旧交を忘れず訪問奔走にあずかり感謝に堪へず。なほ今後、資金募集に関し一層ご尽力あらんこと、懇望のいたりなり。」(12・26)

講話の済んだ後にはたいてい茶話会あるいは懇親会があり、そこで円了は当地の人々と交流を深めた。ただ常に脳裏には寄付金のことがあった（はずである）。実務の詳細は同行者に任せていたとはいえ、巡講の目的はあくまで哲学館創設資金の募集にある。もっとも、巡講は見知らぬ土地に足を踏み入れること、好奇心旺盛な円了にとって、それは新鮮な驚きであり、「楽しみ」となった（はずである）。一見事務的な巡講日誌の記述にも円了の観光的行動を認めることができる。

いうまでもなく巡講は歓迎された。巡講は円了にとってやりがいのある仕事だった。「さすがの大堂も聴衆満ちてまさにあふれんとす。」(12・146)当初は勝海舟の揮毫を持参したが、いつしか自らも揮毫するようになっていた。「当村内のために、はじめて大幡の揮毫をなす。」(12・147) 巡講中は、訪問地の寺院、個人宅、旅館等に宿泊している。巡講の開催場所が寺院であることから寺院に宿泊することが多かった（表1～表33「滞在・宿所」参照）。

5. むすび

巡講は講演旅行である。円了は、移動の合間に、当地の景勝に目を奪われ、多くの名所・旧跡に接する機会があった。珍しい風物、事物を見聞する機会もあった。何よりも訪問地の人々との交流・交際を「楽しみ」とした。講演が目的なら旅行（＝観光）は手段にすぎない。しかし、いつしか、手段は目的化、円了にとって「観光」(行動)は巡講の最大の「楽し

み」となった(のではないか)。移動の最中、目にする美しい景観が何より円了の心を捉えた。円了にとって、それは無量の「楽しみ」となり、巡講の原動力となった。旅行日誌もいつしか紀行文の体裁をとるようになっていった。講演自体がパターン化してくるに従い、(巡講に伴う)観光行動は、常に円了に新鮮な驚きと喜び、そして「楽しみ」を与えるものとなっていった。

以上のような「館主巡回日記」にみる井上円了の観光行動は、基本的に後期巡講の日誌・旅行記である『南船北馬集』に受け継がれていく。円了の巡講日誌・旅行記は膨大な量に上る。旅行中、円了が関心をもった事物・事柄も多岐に渡る。それらはいずれも円了の人と思想を知る上で多くの示唆を与えてくれる。本論で取り上げたものはその一部にすぎない。他にも興味ある多くの事例がある。それらの分析・考察は今後の課題としたい。

[注]

¹ 『井上円了選集』からの引用は()内の巻数・頁数で本文中に示す。「館主巡回日記」の初出は、『哲学館講義録』(明治23年12月28日～明治26年3月5日)、『天則』(明治24年9月17日～明治26年5月17日)、『能州各地巡回略報告』(明治33年9月28日)、『紀州南部各地巡回報告』(明治34年5月8日)、『加越及播丹巡回略報告』(明治35年)、『修身教会雑誌』(明治37年3月11日～明治39年7月11日)にそれぞれ掲載されたものだが、ここでは『井上円了選集』からの引用頁を示すに留める。また上記引用に際して、漢数字を算用数字に、現代かなづかいを旧かなづかいに変えるなど一部表記を変えたところがある。なお西暦年号は省いた。

² 全国巡回講演の詳細については特に三浦(2016)458～556頁を参照されたい。

³ 「館主巡回日記」では、明治26年2月9日以降、明治33年7月17日までの巡講については記述が中断されていて、その間の内容は不明である。「日記」は、明治33年7月18日の能登巡講から再開され、明治39年1月31日まで続く。但し、明治36年に中断があるが、これは第2回の海外視察(明治35年11月15日～明治36年7月27日)があったためである。

⁴ 各巡講における面会者の詳細については、表1～表33の「交流・交遊」の項を参照のこと。なお、表1～表33は、東洋大学井上円了記念学術センター編『井上円了選集』第12巻、1997年3月、をもとに筆者が作成したものである。

⁵ 三浦(2016)、466頁、参照。なお「館主巡回日記」には、「北海道論」(12・79～85)、「九州論」(12・94～100)、「能州巡回報告演説」(12・107～116)、「南紀巡回報告演説」(12・126～136)、「大和論」(12・183～185)といった、当該地方一覧の総括的な所感文が付されている。そこには円了の率直な感想と所感が忌憚なく記されている。後年、円了は、沖縄県で巡講を行ったが、それをもとに書かれた「沖縄県紀行」に対して沖縄の新聞『琉球新報』が円了を批判する記事を掲載し、筆禍事件に発展した。この詳細については、佐藤(2016)を参照されたい。

⁶ 円了は、学生時代、『漫遊記』と称する自筆本の旅行記を遺していた。そこには後年書かれる旅行記の原型をみることができる。『漫遊記』で留意すべきは、若い頃から円了が風景賛美の機会がある観光旅行を楽しんでいたことである。この詳細については堀（2016b）を参照されたい。

[参考文献]

- 佐藤厚（2016）「井上円了の沖縄巡講－巡講の内容と筆禍事件－」『井上円了センター年報』第24号、東洋大学井上円了研究センター、2016年3月、105～139頁
- 東洋大学井上円了記念学術センター編（1997）『井上円了選集』第12巻、1997年3月
- 堀雅通（2016a）「旅行記にみる井上円了の観光行動」『国際井上円了研究』第4号、国際井上円了学会、2016年3月、112～113頁
- 堀雅通（2016b）「井上甫水著『漫遊記』にみる井上円了の観光行動について」『大学院紀要』第52集、東洋大学大学院国際地域学研究科、2016年3月、61～90頁
- 堀雅通（2016c）「旅行記にみる井上円了の観光行動と交通利用について」『観光学研究』第15号、東洋大学国際地域学部、2016年3月、11～38頁
- 三浦節夫（2013）「井上円了の全国巡講データベース」『井上円了センター年報』第22号、東洋大学井上円了記念学術センター、2013年3月、37～160頁
- 三浦節夫（2016）『井上円了一日本近代の先駆者の生涯と思想』教育評論社、2016年2月

表1 静岡県における全国巡回講演

期 間	明治23年11月2日～9日
行程・交通	新橋発車→大磯町→静岡市→焼津市→掛川市→浜松市（鉄道）
目的・内容	「教育将来の方針ならびに哲学館拡張の趣意を演述す。」(12・11)「学術上の演説をなす。」(12・11)「教育上の講演をなす。」(12・11)「仏教演説会を開き、会后、懇親会あり。」(12・12)
滞在・宿所	大東館（静岡）、吸月楼（掛川）、町長内田正氏隠宅（浜松）、芙蓉館（浜松）
交流・交遊	知事、書記官、参事官、学務課長、貴族院議員、新聞主筆、県会議員、師範学校長、市長、銀行頭取
観光行動	記載なし

出所：筆者作成

表2 愛知県ならびに岐阜県における全国巡回講演

期 間	明治23年11月10日～17日
行程・交通	浜松内田氏宅発→豊橋市→岡崎市→名古屋市→岐阜市→名古屋市→岐阜市（鉄道）
目的・内容	「講話二席を開き、晩刻より百花園の懇親会に出席する。」(12・13)「資金募集の件を依頼す。」(12・14)「教育上の談話をなす。」(12・14)「倫理上の談話をなし」(12・14)「宗教上の講話を開き」(12・14)「哲学館拡張の演説をなす。」(12・15)
滞在・宿所	小島屋（豊橋）、下茶屋町鶴屋（名古屋）、有隣亭（名古屋）、玉井屋（岐阜）

交流・交遊	学校教員、町長、県会議員、大谷派別院、新聞社員、学校掛員、郡長、高等小学校長、郡書記、知事、書記官、参事官、師範学校長、中学校長、県庶務課長、属官、教務取締所長、曹洞宗大光院、万松寺、真言宗宝生院、軍医監、陸軍大尉、医学士、法雨協会、検事、中学教諭
観光行動	記載なし

出所：筆者作成

表3 滋賀県における全国巡回講演

期 間	明治23年11月18日～27日
行程・交通	岐阜発→長浜市→彦根市→大津市→京都→安土町→五個荘町→愛知川町→草津→三重県(鉄道)
目的・内容	「町内議事堂において教育上の談話をなす。」(12・16)「資金募集の件を依頼す。」(12・17)「明性寺に至り哲学の講話をなす。」(12・17)「右の諸氏に資金募集の件を託し・・・有志勧誘のことを依頼す。」(12・17)「哲学館寄付金の件を依頼す。」(12・17)「滋賀県教育会に出席し教育上の談話をなす」(12・17)「同和会の依頼に応じ、本福寺において仏教演説をなす。」(12・18)
滞在・宿所	井筒屋(長浜)、遠藤某宅(彦根)、魚清楼(大津)、丸助(愛知川)
交流・交遊	大谷派別院、郡長、輪番、警部長、公立病院長、高等小学校長、郡吏、教員、町内有志者、銀行頭取、中学教諭、郡書記、明性寺、延暦寺、西教寺、滋賀県教育会、書記官、師範学校長、同教頭、同教諭、教育会理事、本福寺、商業学校教員、知事、書記官、警部長、郡長、光沢寺、東南寺、警察署長
観光行動	「午前、楽々園に遊び、城趾に登り、金亀教校をたずぬ。」(12・17)

出所：筆者作成

表4 三重県における全国巡回講演

期 間	明治23年11月28日～12月5日
行程・交通	津市着→松阪市→伊勢市→松阪市→四日市市→桑名市(鉄道) 安土町→五個荘町→愛知川町→草津→三重県(鉄道)
目的・内容	「十一時より教育上の談話をなす。午後また仏教演説をなす。」(12・20)「哲学館義捐のことを依頼す・・・資金募集の件を依頼す。」(12・20)「伊勢新聞社楼上において教育心理上の講話をなす・・・夜に入りて聴潮館に懇親会を開く。」(12・20)「哲学館拡張の旨趣を述ぶ。」(12・20)「着後ただちに真光寺において仏教演説をなす・・・夜に入りて、また教育演説をなす・・・演説後、松茂楼に開きたる懇親会に出席す。」(12・21)「大谷派別院において哲学上の講話をなす。」(12・22)「夜に入りて、中橋座において仏教演説をなす。聴衆二千余名。」(12・22)
滞在・宿所	若六方(津)、棒屋(松阪)、美濃屋(四日市)、江場円通寺(桑名)
交流・交遊	師範学校教諭、参事官、市長、新聞社主、知事、書記官、県会議長、四天王寺、天然寺、県官、議員、教員、生徒、同郷会長、郡教育会幹事、郡長、高等小学校長、尋常小学校長、新聞社支局長
観光行動	「松阪を去りて山田(伊勢市)に至る。ただちに太廟を参拝」(12・21)

出所：筆者作成

表5 愛知県（第二回）における全国巡回講演

期 間	明治23年12月6日～15日
行程・交通	桑名発→津島市着→熱田（名古屋市熱田区）→大野（常滑市）→半田市→北大浜（碧南市）→西尾市→蒲郡市→豊川市→沼津→東京着（鉄道）
目的・内容	「高等小学に至り教育上の講話をなす・・・常信坊に至り仏教演説をなす・・・芳心亭において懇親会あり。」(12・22～23)「資金募集の件は青木文七、野口吉十郎氏に委託す。」(12・23)「義捐、勧誘の件を依頼す。」(12・24)「朝、重ねて婦人協会において演説」(12・24)「朝、有志数名大可庵に相会し、哲学上の講話の依頼に応ず。」(12・24) (12・24)「哲学館寄付の件を依頼す。」(12・24)
滞在・宿所	長尾如雲氏宅（津島）、光明寺（大野）、新文亭（半田）、山川大可方（西尾）、専覚寺（蒲郡）、円通寺（桑名）、沼津に着し、牛臥山下の海水浴場に投宿す。」(12・25)
交流・交遊	教育者、有志者、教員、碧南婦人協会、郡長、西光寺、郡書記、妙巖寺、村長
観光行動	記載なし

出所：筆者作成

表6 静岡県における全国巡回講演

期 間	明治24年1月31日～2月5日
行程・交通	朝八時、新橋発車→興津→清水港→藤枝市→平田村（小笠町）→中泉町（磐田市）(鉄道)
目的・内容	「哲学館拡張の旨趣賛成を請ふ。」(12・28)「資金募集の件を依頼」(12・28)「実相寺において学術演説をなす。」(12・28)「千登世楼に会し、資金募集の方法を議し、その件を町役場に依頼することとなす。」(12・28)「高等小学において教育上の談話をなす。」(12・28)「旅亭に相会し、資金募集の方法を議し、かつその件を依頼す。」(12・28)「劇場豊国座において学術演説をなす。」(12・29)
滞在・宿所	千登世楼に休憩
交流・交遊	清見寺、清水町役場
観光行動	記載なし

出所：筆者作成

表7 滋賀県ならびに和歌山県における全国巡回講演

期 間	明治24年2月6日～15日
行程・交通	中泉町発→八幡町（能登川町）→愛知川町→大阪→堺→高野山→和歌山→大阪→徳島行きに乗船
目的・内容	「雄小学に至り、はじめに生徒に対し一席の演説をなし、つぎに公衆に対し二席の演説をなす。」(12・30)「教育倶楽部の依頼に応じ、宝満寺において教育上の講義をなす。」(12・29)「資金募集の件を更に久保郡長に依頼す」(12・30)
滞在・宿所	「高野山普門院に宿す。」(12・30) 藤屋（和歌山）
交流・交遊	高野山門主高岡増隆僧正に謁し、(12・30)、師範学校教員、知事、市長、小学教員、師範学校長、市長、校長、市会議長、県会議員、医師、参事官
観光行動	「弘法大師墳墓に詣し・・・金堂に詣し」(12・30)、朝、和歌浦を見物」(12・30)

出所：筆者作成

表8 徳島県における全国巡回講演

期 間	明治24年2月16日～22日
行程・交通	徳島市着→川島町→脇町→池田町→高知県に入る→杖立峠→久寿軒村にて泊
目的・内容	「午前、桜井知事に面謁し哲学館の旨趣を請ふ。」(12・31)「名東郡集会所において教育上の談話をなす。」(12・31)「慈船寺において仏教上の講話をなす。」(12・31)「皇典講究所において人類学に関する一席の演説をなす。」(12・31)
滞在・宿所	平亀楼（徳島）
交流・交遊	知事、市長、中学校長、師範学校長、徳島人類学会幹事、同会員、師範学校教頭、中学教諭、驚覚会幹事、仏教倶楽部員、郡役所学務掛、箸蔵寺住職、郡長、郡役所書記、村長、神官
観光行動	「大滝山に散歩す。」(12・31)

出所：筆者作成

表9 高知県における全国巡回講演

期 間	明治24年2月23日～3月4日
行程・交通	久寿軒村→高知市→国府村（南国市）→安芸町（安芸市）→田野村（田野町）→安芸町→山田町（土佐山田町）→高知→須崎町（須崎市）→伊予松山・川口村
目的・内容	「中学講堂において中学生徒に対して道徳上の談話をなす・・・教育会の依頼に応じ一席の演説をなし、あはせて哲学館拡張の旨趣を陳ず・・・同所において師範学校生に対し教育上の談話をなす。演説後、中学ならびに師範学校教員諸氏の案内にて晚餐の饗応にあずかる。」(12・33)「中学講堂において女子教育の必要を演ず。婦人会員の依頼に応ずるなり。」(12・34)
滞在・宿所	延命軒（高知）、宿坊長法寺、西内政治郎氏宅、
交流・交遊	海南学校教諭、中学校長、中学校教諭、師範学校教諭、知事、本願寺別院、教育会、長法寺住職、真慶寺、婦人会、教育会長、郡長、市長、警察署長
観光行動	記載なし

出所：筆者作成

表10 愛媛県ならびに香川県における全国巡回講演

期 間	明治24年3月6日～24日
行程・交通	（高知県）川口村→愛媛県→久万町→松山市→三津港→別府港→宇和島→別府→今治市→多度津→琴平町→丸亀市→高松市→長尾町→阿州撫養町
目的・内容	「勝間田知事に謁し哲学館拡張の旨趣賛成を請ふ。」(12・35)「高等小学において臨時教育会の演説をなす。散会后、教員諸氏の依頼に応じて心理学の講義をなす。」(12・36)「海外仏教事情を演述す。」(12・36)「明源寺において教育上の談話をなす。当地教育会の依頼に応ずるなり。」(12・36)「劇場において宗教上の講演を開く・・・茶会に出席し一席の談話をなす。」(12・36)「哲学館拡張の趣意賛成ならびに義捐の件を依頼す。」(12・37)「柴原知事に謁し哲学館賛成の承諾を得、午後一時、師範学校に至り、本県教育会の依頼に応じ徳育上の談話をなす。」(12・38)

滞在・宿所	「予州に入りて宿す」(12・35)、城戸屋（松山）、居村屋、多度津旅亭花菱、老松園（高松）、三木屋（長尾）、浜野屋（撫養町）
交流・交遊	参事官、師範学校長、高等小学校長、中学校長、愛媛新報記者、県属、知事、海南新聞社員、仏教青年会、市長、松山仏教有志家、各宗有志諸氏、町長、郡長、青年会、教育会副会長、警察署長、裁判所長、司獄官吏、収税長、参事官、師範学校長、同教頭、共攻会、節減会、真行寺、明源寺
観光行動	「道後温泉に遊び入浴す。」(12・35)「豊後国別府港に着し、終日旅亭にありて宇和島行きの船を待つ。当所に温泉あり。」(12・36)「その夜、別府に一泊す。」(12・37)「汽車にて琴平町に至り、虎屋に憩ひ、神社に詣し、社務所を訪ひ」(12・37)「公園に遊び」(12・38)

出所：筆者作成

表11 淡路国における全国巡回講演

期 間	明治24年3月25日～4月1日
行程・交通	淡路・撫養町（鳴門市）滞在→鳴門海峡→福良港→三原町→洲本市→志筑町（津名町）岩屋町→明石→京都→汽車にて帰京
目的・内容	「高等小学において教育上の演説をなす。」(12・39)「宗教学の講義をなす。」(12・40)「八幡寺において教育上の演説会を開く。」(12・40)「哲学館の賛成を請ふ。」(12・40)
滞在・宿所	記載なし
交流・交遊	郡書記、県学務課長、小学校長、郡教育会、地藏寺、八幡寺、「(京都東・西) 両本願寺に詣し、東寺をたずねて土宜法竜師に会し、管長原心猛師に謁し、府知事北垣国道氏に謁し、ともに哲学館の賛成を請ふ。」(12・40)「静岡に降車。蜂屋師範学校長をたずね、時任知事に謁す。」(12・40)
観光行動	「鳴門海峡を渡り淡州福良港に着す。」(12・39)「海峡を渡りて明石に移り・・・京都に泊す。」(12・40)

出所：筆者作成

表12 丹波、丹後、但馬における全国巡回講演

期 間	明治24年5月11日～23日
行程・交通	新橋発車→京都着→京都滞在→亀岡町（亀岡市）→福知山→舞鶴町（舞鶴市）→宮津町（市）→天橋立→峰山町→出石町→豊岡町（市）→八鹿→村岡→鳥取市
目的・内容	「高等小学校にて郡内の教育家ならびに有志者に対し演説をなす。その夜、法鷲寺において仏教演説をなす。」(12・41)「午後、教育家に対し演説をなし、引き続き有志者の茶会に列席す。」(12・41)「町役場において教育上の演説をなし、夜、福成寺において宗教上の演説をなす。」(12・42)
滞在・宿所	「遠藤氏の宅に宿す。」(12・41)
交流・交遊	教育会、府庁、大円寺、宗教家、郡長、高等小学校長、郡書記、法鷲寺、警察署長、裁判所長、女子学校長、護法会員、福成寺、漢学者、仏教婦人会、青年会、中学校長
観光行動	「朝、天橋を経て峰山町に至る。」(12・42)

出所：筆者作成

表13 鳥取県因幡、伯耆における全国巡回講演

期 間	明治24年5月24日～29日
行程・交通	鳥取市滞在→長瀬村（羽合町）→倉吉（市）→倉吉市滞在→米子→松江市
目的・内容	「西村県知事に面話し哲学館の賛成を請ひ」(12・43)「午前、女学校、高等小学、尋常中学を参観し、かつ学校において演説をなす。」(12・43)「資金募集の件は同志会に依頼す。」(12・43)
滞在・宿所	「宿所勝福寺なり。」(12・43)「宿所皆美楼なり。」(12・44)「宿所大蓮寺なり。」(12・44)
交遊・交流	県知事、市中有志、高等小学校長、参事官、中学校長、師範学校長、警察署長、郵便電信局長、市長、助役、郡長
観光行動	「東郷温泉養生亭に休憩」(12・44)

出所：筆者作成

表14 島根県出雲国における全国巡回講演

期 間	明治24年5月30日～6月5日
行程・交通	松江市滞在→米子町（市）→松江市→平田町（市）→今市町（出雲市）→杵築町（大社町）
目的・内容	「篠崎知事に面話し哲学館の賛成を請ふ・・・中学校に至り一席の演説をなし、ただちに教育会に出席し、本館拡張の旨趣ならびに教育上の私見を演述す。」(12・44)「宗泉寺に至り仏教演説をなす。」(12・45)「朝、米子高等小学校を参観し、資金募集の件を郡長および校長に依頼して、松江に向かひて発船す。」(12・45)「当夜、青年会の依頼に応じて哲学の講義をなす。」(12・45)
滞在・宿所	記載なし
交流・交遊	県知事、師範学校長、中学校長、県参事官、宝泉寺、曹洞宗務支局、仏教愛楽会、本誓寺、愛楽社員、青年会、西光寺、宮司、乗光寺、西楽寺、十楽寺
観光行動	「(出雲) 大社に参詣」(12・46)

出所：筆者作成

表15 島根県石見国浜田以東における全国巡回講演

期 間	明治24年6月6日～11日
行程・交通	杵築町（大社町）発→波根西村（大田市）→大田市→大森（大田市）→大国村（仁摩町）→宅野村（仁摩町）→天河内村（仁摩町）→温泉津（温泉津町）→郷田（江津市）
目的・内容	「資金募集の件を依頼」(12・46)、「午後、妙光寺において哲学上の講話をなす。」(12・47)「榮泉寺において宗教哲学の講話をなす。」(12・47)「英和学校に至り一席の談話をなし」(12・47)「当夜、有志者の依頼に応じて宗教哲学を講演す。」(12・48)
滞在・宿所	「柿田茂氏宅に宿す。」(12・46)「安井好尚氏の宅にいこひ」(12・47)「宿所西楽寺なり。」(12・48)、
交流・交遊	教育会、松林寺、榮泉寺、郡長、西暁寺、竜善寺、満行寺、西楽寺
観光行動	「朝、小舟に乗じて辛島、麦島の奇景を巡見し」(12・48)

出所：筆者作成

表16 島根県石見国浜田以東における全国巡回講演

期 間	明治24年6月12日～19日
行程・交通	郷田（江津市）→浜田（浜田市）→益田（益田市）→津和野（町）→三田尻→神戸→東京（舟、汽車）
目的・内容	「午後、石見学校長岩波静弥氏の依頼にて石見学校生徒に対して一席の談話をなし、ただちに楓川学校に帰りて公衆に対し哲学館拡張の旨趣ならびに仏教哲学に関する演説をなし、引き続きて教校生徒に対して談話をなす。」(12・49)「夜に入りて曹洞宗寺院においてインド哲学の講話をなす。」(12・50)
滞在・宿所	「宿所を菊水亭に定む。」(12・49)「宿所泉光寺なり。」(12・49)「橋本重平氏の宅に宿す。」(12・49)
交流・交遊	石見学校長、郡長、県会副議長、郡書記、教育会、青年会
観光行動	記載なし

出所：筆者作成

表17 山形県における全国巡回講演

期 間	明治24年7月17日～31日
行程・交通	上野発車→福島泊→栗子隧道→米沢市→上之山町→山形市→寒河江村（市）→天童町（市）→楯岡町（村山市）→新庄町（市）→鶴岡町（市）→酒田町（市）→松嶺町（松山町）→新庄町（市）
目的・内容	「午前、興讓学校において教育有志者に対し教育上の演説をなし、午後、演劇場において公衆に対し学術上の演説をなす。」(12・51)「師範学校において教育上の演説をなす。」(12・51)「長谷部知事に面謁し本館拡張の旨趣を陳述し、その賛成を請ふ。」(12・52)「資金募集の件は郡書記および発起人三名に依頼す。」(12・52)「午前、郡役所議事堂において教育上の演説をなす。」(12・52)「午前、浄福寺においてインド哲学の講話を開き、午後、議事堂において教育上の演説をなす。」(12・53)
滞在・宿所	福島泊。「宿所餅惣楼なり」(12・50)「宿所亀松閣なり。」(12・51)「宿坊は浄福寺なり。」(12・53)
交流・交遊	市長、館友、市教育会、興道会、学務掛、西蓮寺、師範学校長、中学校長事務取り扱い、高等小学校長、書記官、参事官、収税長、貴族院議員、医学士、専称寺、郡長、浄福寺、善宝寺、青年会、庄内人類学会、曹洞宗寺院諸氏、積雲寺、長源寺、善正寺
観光行動	「上杉神社に詣す。」(12・51)「興讓学校、華溪学校、館山学校ならびに製糸場を巡見す。」(12・51)

出所：筆者作成

表18 播州ならびに広島県（第一）における全国巡回講演

期 間	明治25年1月21日～2月4日
行程・交通	夜九時半、東京発車→神戸港一泊→瀧野町（市）→岡山県備前市→汽船にて尾之道に向かう→汽船にて尾之道より広島市に移る→厳島→宇品港→呉→乗船、赤馬関市

目的・内容	「町会議事堂において竜義会の依頼に応じて演説をなす。」(12・54)「尚道会の依頼に応じて演説をなす。」(12・54)「午後、誓願寺において、本館拡張の旨趣ならびにインド哲学の概要を演説す。」(12・55)「午後、師範学校に至り、教育、学術上の演説をなし、同校内および中学校内を参観」(12・56)
滞在・宿所	神戸港一泊。「宿坊円光寺なり。」(12・54)「旅宿三好野花壇なり。」(12・55)「長沼旅亭に宿す。」(12・55)「尾之道旅宿」(12・55)「宿所を東横町森田藤兵衛氏別宅に設けこれに移る。」(12・55)
交流・交遊	円光寺、尚道会、知事、師範学校長・教頭、誓願寺、軍医、少佐、師団長、旅団長、参謀長、県書記官、明法寺、開成舎、貴婦人会、山陰新聞社主
観光行動	「備前吉永停車場に降り閑谷巖を訪ふ・・・巖内を参観」(12・55)「後樂園を巡観」(12・55)「朝より陸行厳島に至り、紅葉谷岩惣方に休憩し、社務所を訪ひ本館拡張の旨趣賛成を請ひ」(12・55)「饒津神社に詣し、・・・一場の演説をなし、平尾少佐の案内にて部内を参観」(12・56)

出所：筆者作成

表19 山口県（第二）における全国巡回講演

期 間	明治25年2月5日～19日
行程・交通	赤馬（間）関（下関市）着舟→豊浦町→豊東村（豊浦町・菊川町）→吉田村（下関市）→王喜村（下関市）→生田村（山陽町）→埴生→船木村（楠町）→厚東村（宇部市）→西岐波村（宇部市）→萩町（市）→秋吉村（秋芳町）→大田（美東町）
目的・内容	「本館拡張の賛成を請ひ、あはせて有志勧誘の件を依頼す。」(12・57)「市内教法寺において演説会を開く。」(12・57)「資金勧誘も倶楽部員の諸氏に依頼す。」(12・59)
滞在・宿所	「当夜、魚清楼に泊す。」(12・57)「当夜、竹山次郎氏宅に泊す。」(12・58)「宿坊正円寺なり。」(12・58)「宿坊仏光寺なり。」(12・59)「宿坊福田寺なり。」(12・59)
交流・交遊	光明寺、真宗有志者、市長、助役、校長、教育会、教法寺、徳応寺、明円寺、教念寺、敬覚寺、青年会、常光寺、常元寺、専光寺、正円寺、法輪寺、西光寺、仏光寺、真証寺、青年倶楽部
観光行動	記載なし

出所：筆者作成

表20 山口県（第三）における全国巡回講演

期 間	明治25年2月20日～3月4日
行程・交通	大田発→山口町（市）→湯田温泉→佐波村（防府市）→三田尻（防府市）→徳山（市）→花岡（下松市）→下松（市）→室積村（光市）→岩国町（市）→尾之道（尾道市）→京都→東京
目的・内容	「法界寺において仏教演説をなす」(12・59)「師範学校講堂において教育上の談話をなす・・・真証寺において令女会の演説をなす・・・席上、本館拡張の旨趣ならびに哲学大意を演説す。」(12・60)
滞在・宿所	「銭湯小路中村方に宿す。」(12・59)

交流・交遊	法界寺、各宗倶楽部、真証寺、県官吏、県官、判事、校長、国会議員、徳心寺
観光行動	「湯田温泉松田楼において会食をなす。」(12・59～60)「まず八幡神社に詣し」(12・60)「午前、錦帯橋を見物し」(12・61)「尾之道発車。京都一泊。」(12・61)

出所：筆者作成

表21 群馬県における全国巡回講演

期 間	明治25年4月5日～9日
行程・交通	朝、乗車→安中町（市）→湯沢温泉→松井田町→里見村（榛名町）→高崎町（市）→八幡村（高崎市）→帰宅
目的・内容	「午後、妙光院において演説会を開く・・・夜、湯沢温泉において懇親会あり、かつ、これに浴宿す。」(12・62)「午後演説、続きて懇親会あり。」(12・62)
滞在・宿所	「当夕、酢屋において懇親会あり、かつここに宿す。」(12・62)「宿寺は光明寺なり。」(12・62)
交流・交遊	崇徳寺、光明寺、覚法寺、酬恩会、医師、安国寺、「武田実海氏同行して各所を巡回」(12・62)
観光行動	「夜、湯沢温泉において懇親会あり、かつ、これに浴宿す。」(12・62)

出所：筆者作成

表22 新潟県における全国巡回講演

期 間	明治25年4月20日～6月2日
行程・交通	<ul style="list-style-type: none"> ・ 朝六時、上野発車→信濃地（長野県）→新井村（市）→高田（新井市）→直江津（上越市）→上杉村（三和村）→安塚村（安塚町）→坂井村（頸城村）→代石村（吉川町）→梶村（吉川町）→柏崎→関原→帰村（浦村） ・ 浦村→長岡→新潟（市）→沼垂町（新潟市）→葛塚村（豊栄市）→新発田町（市）→水原町→亀田町（亀田町）→新津町（市）→田上村（田上町）→羽生田村→加茂町（加茂市）→白根町（市）→三条町（市）→見附町（見附市）→浦村（越路町） ・ 浦村→小千谷→雪峠→千手町村（川西町）→十日町→六日町→塩沢（町）→小出（町）→小千谷町→長岡（市）→大面村（栄町）→寺泊町→野中才村（分水町）→与板町→帰村 ・ 飯塚村→新町村（小国町）→加納村（柏崎市）→与板村→野田村（柏崎市）→新道村→柏崎町（市）→直江津→長野町泊→高田停車場→汽車にて帰京
目的・内容	「午後、開会。会后、本館拡張の旨趣を演説す・・・募金の件も右発起諸氏に依頼す。」(12・64)「午後、超願寺において仏教上の演説をなす。」(12・64)「北越学院に至り道徳上の談話をなす。午後、超願寺において再び仏教上の演説をなす。」(12・65)「午前、仏教哲学について一席の演説をなす。」(12・69)「商業と哲学との関係について一席の演説をなし、終はりて懇親会あり。」(12・69)

滞在・宿所	「新井宿坊は大谷派別院なり」(12・63)「山岸高次郎氏宅に宿す。」(12・64)「宿坊性徳寺なり」(12・64)「宿坊超願寺なり」(12・64)「宿坊宗円寺なり」(12・65)「宿坊は菓城寺なり」(12・66)「宿坊広円寺なり」(12・66)「宿坊正立寺」(12・66)「大野源呂久氏の宅に泊す。」(12・67)「浦村に帰りて泊す。」(12・67) 以下、妙宗寺、願浄寺、奧琳寺、願念寺、西永寺、願竜寺に宿泊する。
交流・交遊	光樹寺、林覚寺、添景寺、法定寺、浄厳寺、円了寺、性徳寺、超願寺、師範学校校長・教頭・教員、勝念寺、貴婦人会、本明寺、光照寺、福明寺、警部、住職、村長、宗円寺、瑞雲寺、観音寺、西厳寺、通心寺、菓城寺、小学校長、蓮徳寺、円福院、広円寺、正立寺、西永寺、浄照寺、栄行寺、近郷の有志者、訓導、極楽寺、善光寺、妙宗寺、長念寺、婦人協会、願浄寺、奧琳寺、その他寺院
観光行動	「当村（田上村）に真宗宗祖繫櫃の旧跡あればこれに詣す・・・地蔵尊に詣して同郡加茂町に移る。」(12・66)「如法寺天然ガス点火を一見し」(12・67)

出所：筆者作成

表23 北海道における全国巡回講演 「北海道論」付記

期 間	明治25年7月19日～9月4日
行程・交通	午前六時半、上野発車→福島（市）→青森町（市）→函館（市）→馬車にて江差町→夜半乗船→渡島町（寿都町）→潮路村（寿都町）→美谷（寿都町）→島古丹（寿都町）→岩内（岩内町）→余市（余市町）→湊町（古平町）→小泊村（積丹町）→札幌（市）→永寿町（増毛町）→小樽（市）→手宮町（小樽市）→色内町（小樽市）→熊碓村（小樽市）→札幌→岩見沢（市）→室蘭（市）→森（町）→馬車にて函館→乗船、青森着港→盛岡→帰京
目的・内容	「師範学校をたずねて校内を参観す。」(12・72)「慈善会の依頼に応じ一場の演説をなし・・・本館拡張の旨趣を陳述す。」(12・72)「本館拡張の旨趣ならびに哲学、宗教の大意を演説す。」(12・73)「小学校において演説をなし、夜分、祐専寺において演説をなす。募金の件は三浦氏に依頼す。」(12・78)
滞在・宿所	「宿所福島町通十二丁目清賞館なり。」(12・72) 旅亭中島屋、松波栄太郎氏宅、宝海寺、観音寺、大谷派本願寺別院、潤澄寺、「直江氏の宅を訪ひここに一泊す。」(12・77)
交流・交遊	知事、書記官、逓信省参事官、蓮心寺、高竜寺、慈善会、婦人教育会、私立教育会、控訴院長、郵便電信局長、正覚院住職、郡長、警察署長、小学校長、竜洞院、西光寺、最尊寺、智恵寺、永全寺、即信寺、乗念寺、宝海寺、衛生会、観音寺、大覚寺、共進会、新栄寺、潤澄寺、竜淵寺、量徳寺
観光行動	「午後、斎藤氏とともに公園に遊び浅田楼に憩ふ。」(12・72)「午前、斎藤氏とともに勝田楼に至り鉱泉に浴す。」(12・73)「午前、農学校演農会長佐藤昌介氏の案内にて農園に至り実地演習をみる。帰路、博物館を一見す。」(12・76)「夕刻、斎藤唯信氏、菊池祐章氏とともに公園に遊歩す。」(12・78)

出所：筆者作成

表24 九州における全国巡回講演 「九州論」付記

期 間	明治25年12月17日～明治26年2月8日
行程・交通	東京出発→興津海水楼滞在→大阪→太湖丸第二号に乗船、馬関（下関）へ→馬関着港→深川村（長門市）→黄波戸村・日置村（日置町）→菱海村（油谷町）→向津具村（油谷町）→川棚村（豊浦町）→小倉（北九州市）→熊本市→長崎（市）→佐賀市→福岡市→若松町（北九州市）→久留米市→吉井町→豆田町（日田市）→隈町（日田市）→馬関・赤間関市（下関市）→中津町（市）→椎田村（椎田町）→小倉→淀川丸に乗船→神戸→浜松→東京
目的・内容	「法蓮寺において教育ならびに宗教の演説をなす。」(12・85)「夜分、守永氏宅にて陸軍婦人会ならびに好友会員に対し教育、道徳の談話をなす。」(12・87)「哲学館旨趣賛成誘導の件を諸氏に依頼す。」(12・89)「夜分、高等小学において城山会の依頼に応じて教育談話をなす。」(12・92)
滞在・宿所	「泉含章氏の宅に入宿す。」(12・85)「大藤雅助氏の宅に泊す。」(12・86)「湯玉村に一泊す。ときに夜九時なり」(12・86)「洗馬町研屋に投宿す。」(12・88)「福島屋に宿す。」(12・89)「元町堺屋に宿す。」(12・89)「吉井町に着し旅店に入宿す。」(12・91)「花屋へ一泊す。」(12・93)
交流・交遊	光明寺、法蓮寺、郡長、浄泉寺、医学士、法学士、知事、九州学院長、正覚寺、大谷派説教所長、師範学校長、中学校長、参事官、市長
観光行動	「馬関市外を一見」(12・85)「湯本温泉に浴す。温泉に礼湯、恩湯の二種あり」(12・85)「人丸峠旅亭を發し村内人丸神社に詣し」(12・86)「午前、(浜に)出でて鯨魚の解剖を見る。午後また捕鯨あり。その状、実に一大奇観たり。」(12・86)「午後、(熊本)城内を參觀し、本妙寺および錦山神社（清正公の社）を拝詣す。」(12・88)「(監)獄内を一見す。(12・89)「これより松原神社公園地をたずね」(12・89)「箱崎八幡宮に詣し、名島に渡り神功皇后三韓征討に用ひたる船櫓の化石したるものを見る。」(12・90)「午前、港内築港の実況を一見し」(12・90)「十時、二日市に降車し、都府楼の古趾觀世音寺、大宰府天神に巡詣し」(12・90)「篠山神社を巡詣して帰館す。」(12・91)

出所：筆者作成

表25 能州における全国巡回講演（「能州巡回日記」）「能州巡回報告演説」付記

期 間	明治33年7月18日～9月1日
行程・交通	東京出発→金沢市→七尾町（市）→大吞村（七尾市）→徳田村（七尾市）→越路村（鹿島町）→滝尾村（鹿島町）→鳥屋村（鳥屋町）→田鶴浜村（田鶴浜町）→熊木村（中島町）→中島村（中島町）→鳥崎村（穴水町）→東保村（穴水町）→中居村（穴水町）→兜村（穴水町）→鶴川村（能都町）→諸橋村（穴水町）・・・北大海村（押水町）
目的・内容	「午後、七尾町本竜寺にて挙行せし仏教同盟会発会式に臨み演説す。」(12・101)「午前、同寺（乗光寺）にて仏教演説一席、午後、公会堂にて教育演説一席、引き続き茶話会あり。」(12・103)「午後、正覚寺において演説および茶話会あり。」(12・104)「午後開会す・・・午前講義、午後演説会館す。」(12・105)「引き続き青年文学会場にて哲学上の講義をなす。」(12・106)
滞在・宿所	「金沢市一泊（浅田屋）」(12・101)「宿所津又楼にして」(12・101)「宿所旅店（中村）」(12・101)「宿所滝尾旅店」(12・102)「宿所ともに泊宗平氏(村長)の宅なり」(12・102)「宿所古川屋」(12・103)「宿所広谷喜久松氏の宅なり。」(12・103)「宿所は薬師堂なり。」(12・104)「宿所高島弥五郎氏宅なり。」(12・104)「宿所中村家」(12・104)「宿所盛田勇作氏宅」(12・106)

交流・交遊	長福寺、常福寺、明願寺、仏教徒同盟会灘支部、組合寺院、西福寺、西永寺、専順寺、浄誓寺、法融寺、覚照寺、正恩寺、乗光寺、郡長、長光寺、長栄寺、輪島町仏教同盟会、照福寺、光栄寺、浄蓮寺、善行寺、願隆寺、福善寺、照明寺、有志者、招聘会、若部仏教会、押水仏教同盟会、護法会、浄泉寺
観光行動	「途中、風景絶佳なり。」(12・101)「能州第一の名勝たる九十九湾を遊覧す。」(12・103)「午後、曹洞宗大本山たる総持寺に詣し」(12・104)「本誓寺に移る。鳳至郡第一の伽藍なりといふ。」(12・105)

出所：筆者作成

表26 南紀における全国巡回講演（「南紀巡回日記」）「南紀巡回報告演説」付記

期 間	明治33年11月7日～12月31日
行程・交通	新橋発車→暴風雨で途中停車6時間→大阪着→難波停車場より乗車→和歌山着→宮崎村（有田市）→保田村（有田市）→宮原村（有田市）→湯浅町→広村（広川町）→湯川村（御坊市）→御坊町（市）→印南町→南部町→南富田村（白浜町）→田辺町（市）→川添村（置川町）→日置村（置川町）→周参見村（すさみ町）→田並村（串本町）→潮岬村（串本町）→古座村（町）→富二橋村（串本町）→高池村（古座川町）→田原村（古座町）→下里村（那智勝浦町）→那智村（那智勝浦町）→新宮町（市）→本宮村（町）→尾呂志村（御浜町）→木本町（熊野市）→五郷村（熊野市）→下北山村→木本町→乗船→津→名古屋→帰館
目的・内容	「同村（保田村）字辻堂称名寺に至りて開会す。」(12・116)「宿所は沢崎源一氏宅なり。」(12・116)「夜分、浄行寺において慈善会発会式の演説をなす。」(12・118)「草鞋をうがち峻嶺を越へ川添村字市鹿野に移り、午後開会す。」(12・118)「午後、長徳寺において演説す。哲学講習会の依頼に応ずるなり。夜に入りて茶話会あり。」(12・120)」
滞在・宿所	「宿所富士屋なり。」(12・116)「当夜、成川某氏宅に宿す。」(12・116)「当夕、古碧楼に帰宿す。」(12・117)「宿所今夜楼にして、会場高等小学校なり。」(12・119)「宿屋油屋なり。」(12・120)「玉置基彦氏の宅に一宿を請ふ。同氏宅は瀨峡の上流にありて峡内を一瞰するに妙なり。」(12・121)「宿所喜多館なり。」(12・121)「便船なきをもつて、終日木本町に滞在す。」(12・122)
交流・交遊	視学官、村内有志者、住職、湯川青年会、本勝寺、道成寺、浄国寺、観福寺、教育家、浄行寺、哲学館得業生、町内有志家、村長、万福寺、円光寺、校長、檀那寺、長徳寺、郡視学、光明寺、桃源寺
観光行動	「途中紀三井寺に登覧」(12・116)「御前喜八郎氏宅に一憩して午餐を喫し、蜜柑山を一覧す。当所は有田蜜柑の本場なり・・・木本もまた蜜柑の本場なり。」(12・116)「午前、鐘巻道成寺に詣し、安珍清姫の縁起をはじめ諸宝物を拝観せり。」(12・117)「潮岬灯台および神社を一覧し串本町に少憩」(12・119)「途上、熊野三勝の一たる橋杭の奇景を望見」(12・119)「沿岸の風光すこぶる佳なり・・・午前、那智山に登り海内無双の瀑布を一覧し、西国三十三番の第一なる観音に参詣し・・・熊野三社の一たる速玉神社に詣し、蓬萊山、徐福墓、郡長宅等を尋問す。」(12・120)「新宮を発し、郡視学杉本讓一郎氏の案内にて新宮川の北岸に従ひ歩行して本宮村に入る。行路険悪なるも西岸の奇石怪岩、往々人目を驚かすものあり。」(12・120)「午前、神社に詣して宝物を参観す。」(12・120)「演説後、湯之峰温泉に入浴して帰る。同所には小栗判官および遊行上人の古跡あり。・・・九重村を経て熊野三勝の第一たる瀨峡に向かふ。・・・玉置口より小舟を雇ひ、いはゆる瀨八丁をさかのぼるときに日まさに暮れんとす。兩岸の風致おのずから仙源に遊ぶの思ひをなす・・・十津川村字田戸玉置基彦氏の宅に一宿を請ふ。同氏宅は瀨峡の上流にありて峡内を一瞰するに妙なり。」(12・120～121)

出所：筆者作成

表27 南紀および南勢における全国巡回講演（「南紀および南勢巡回日記」）

期 間	明治34年2月18日～3月20日
行程・交通	東京新橋発車→山田着→鳥羽（市）→的矢村（磯部町）→鶴方村（阿児町）→波切村（大王町）→甲賀村（阿児町）→和具村（志摩町）→浜島村（浜島町）→宿田曾村（南勢町）→五ヶ所村（南勢町）→穂原村（南勢町）→南海村（南勢町）→鶴倉村（南島町）→吉津村（南島町）→島津村（南島町）→二郷村（紀伊長島町）→尾鷲町（市）→相賀村（海山町）→桂城村（海山町）→赤羽村（紀伊長島町）→柏崎村（紀勢町）→滝原村（大宮町）→〔宇治〕山田町（伊勢市）→相可村（多気町）→汽車にて伊賀上野町→人車にて大和国→名古屋→東海道汽車で帰京
目的・内容	「常安寺にて開会す。発起者は須田富八郎氏（町長）、藤田常弥氏なり。」(12・122)「小学校にて開会す。」(12・123)「夜中、劇場にて演説す。実業青年会の依頼に応ずるなり。」(12・124)「寄付金募集の結果、即時に現金二百余円に達し、従来他所に見ざる好成绩を得たり。夜、雲祥寺において開会す。」(12・125)「会場は滝原寺にして、発起者は大西逸郎氏（村長）、吉田久太郎氏なり。」(12・125)
滞在・宿所	「旅館は大坂屋なり。」(12・122)「宿所仙遊寺なり。」(12・123)「当夕、伊藤雲雄氏宅に宿す。」(12・123)「宿所和田善一郎氏宅なり。」(12・123)「会場地蔵院なり・・・住職は・・・本館得業生なり。」(12・124)「会場光雲寺なり。」(12・125)
交流・交遊	町長、常安寺、如意寺、住職、村長、得業生、棲鳳寺、仙遊寺、少林寺、極楽寺、慈眼寺、医王寺、海蔵寺、地蔵院、甘露寺、豪家、郡長、青年会、同窓会、雲祥寺、安楽寺、永昌寺、光雲寺、大連寺、滝原寺、護法会、光明寺、中山寺、山田新報記者（哲学館出身）
観光行動	「朝、灯台を一覧し、午後開会す。」(12・123)「穂原より追間に出ず。その間、山上の眺望絶佳なり。追間より小舟に乗じて南海村字相賀に着す。」(12・124)「土井氏別邸の竹林および当所の梅林を遊覧し、帰りに念仏寺の茶和会に出席演説す。」(12・124)「滝川神社に参拝す。当社地は森林の幽邃なること、けだし全国第一なり。」(12・125)「午前、内外両宮を参拝し、午後、竜太夫方において演説す。」(12・126)「午前、相可より汽車にて伊賀国上野町に至り、これより人車にて大和国月ヶ瀬梅林を一覧し、夜行汽車にて名古屋に出でて、更に東海道汽車に乗り換へ、翌日帰京す。」(12・126)

出所：筆者作成

表28 富山県における全国巡回講演（「富山県巡回日記」）

期 間	明治34年6月23日～9月12日
行程・交通	朝、上野発車→夕、直江津より乗船→糸魚川着→下根知村（糸魚川市）→泊町（朝日町）→横山村（入善町）→新屋村（入善町）→大家庄村（朝日町）→野中村（入善・朝日町）→舟見町（入善町）→浦山村（宇奈月町）→若栗村（黒部市）→三日市町（黒部市）→生地町（黒部市）→魚津町（魚津市）→宮川村（上市町）→滑川町（滑川市）→富山（市）→東岩瀬町・大広田村・針原村・東水橋町（富山市）→舟橋村→上市町・音杉村・柿沢村（上市町）→高野村・東谷村（立山町）→大庄村（大山町）→熊野村（富山市）→大久保村（大沢野町）→八尾町→熊野村（婦中町）→寒江村（富山市）→黒河村（小杉町）→下村→小杉町→二口村（大門町）→高岡市→石動町（小矢部市）→新湊町（市）→伏木町（高岡市）→阿尾村・氷見町・布勢村（氷見市）→戸出町・中田町（高岡市）→南般若村・柳瀬村・般若村・油田村・太田村・出町・五鹿屋村（砺波市）→井波町（市）→福光町（井波市）→福野町→城端町→西野尻町（福野町）→福岡町→北蟹谷村（小矢部市）→石動発→東京着

目的・内容	「午前午後ともに開会す。教育会および有志諸氏の依頼に応ずるなり。」(12・137)「勝善寺において開会す。市内有志者の発起なり。」(12・138)「午後、上新川郡教育会の依頼に応じて演説す。」(12・139)「午前、光厳寺において真宗講話会のために演説す。」(12・139)「午前、本願寺派別院において婦人協会のために演説す。」(12・139)「午後、大久保村法林寺において、保育同窓会のために演説す。」(12・141)「寄付金募集は富山県下第一の好結果を得たり。」(12・144)「万遊寺に移りて開会す。当地青年会および村内有志の発起なり。」(12・145)「午後、別院において公開演説あり。三十余間の大堂、幾千人の聴衆のために声枯れて、ほとんど唾のごときに至る。」(12・146)「さすがの大堂も聴衆満ちてまさにあふれんとす。夜に入り、陸軍砲兵隊のために演説す。」(12・146)「当村内のために、はじめて大幡の揮毫をなす。」(12・147)
滞在・宿所	「宿所大安寺なり。」(12・137)「当夕、舟見町旅店に至りて宿す。」(12・138)「光泉寺に宿す。」(12・138)「土肥七之助氏宅に宿す。」(12・140)「宿所旅館なり。」(12・142)「宿坊正楽寺なり。」(12・144)「宿所富豪桜井宗一郎氏宅」(12・145)「宿所高島金次郎氏宅なり。」(12・147)
交流・交遊	勝蓮寺、大安寺、教育会、明栄寺、西心寺、本竜寺、光泉寺、専念寺、国会議員、中学校長、仏教同盟、町長、照蓮寺、無量寺、円満寺、村長、住職、保育同窓会、法林寺、最勝寺、円徳寺、仏教明徳会、青年会、富豪、万福寺、陸軍砲兵隊、村内有志
観光行動	「親不知の新道をこへ越中の国境に入る。海上の風景すこぶる佳なり。」(12・137)「光栄寺には従来、天狗の怪談あり。」(12・138)「橋上、黒部川の眺望絶佳なり。」(12・138)「当地には蜃気楼の怪あり。」(12・139)「稗田を發し大岩山日石寺に詣す。不動尊および飛瀑をもつてその名あり。・・・堂内、眼病者をもつてみす。眺望また佳なり。」(12・141)「海山の眺望ことに佳なり。」(12・144)「郡界に近き所、弁慶雨晴(あまはらし)の勝景あり。」(12・144)「途中、円山に登り大伴家持卿の記念碑を拝観す。山上の風光秀逸なり。」(12・144)「午前、別院秘蔵の宝物を拝観し、大谷廟および白浪水を巡詣し、終はりて小学校に至り生徒のために演説す。」(12・146)「堂側眺望すこぶるよし。」(12・147)

出所：筆者作成

表29 播州における全国巡回講演（「播州巡回日記」）

期 間	明治35年2月13日～3月26日
行程・交通	夜六時、新橋発車→京都一泊→神戸→明石町・魚住村(市)→加古川町(市)→高砂町(市)→姫路市→赤穂町・有年村(赤穂市)→鞍坂村(上郡町)→佐用村(町)→三日月村(町)→新宮村(町)→安師村(安富町)→神戸村(一宮町)→瀧野町(市)→斑鳩村(太子町)→御津村(町)→網千町・大津村・広村・余部村(姫路市)→菅野村(夢前町)→置塩村(姫路市)→香呂村(香寺町)→甘地村・川辺村(市川町)→田原村(福崎町)→北条町(加西町)→船津村・御国野村(姫路市)→神戸→夜行汽車にて翌朝帰館
目的・内容	「午後、神戸小学校において演説す。兵庫県教育会の依頼に応ずるなり。」(12・148)「午後、称名寺において開会す。興仁会の発起なり。」(12・148)「午後、浄光寺において開会す。仏教同盟会の発起なり。」(12・150)「小学校において教育支会のために演説す。・・・ついで中学校において演説す。・・・更に円光寺において開会あり。知徳婦人会の発起なり。」(12・150)
滞在・宿所	「伊保村正覚寺(鈴木氏宅)に宿す。」(12・148)「宿所錦江楼なり。」(12・148)「当夕、福岡鉄磨氏の宅に宿す。」(12・150)「宿所岡田甚吉氏の宅なり。」(12・150)「宿所は清水戸市郎氏宅なり。」(12・151)「宿坊円光寺なり。」(12・151)「宿坊西勝寺なり。」(12・153)

交流・交遊	兵庫県教育会、明石郡教育支会、郡長、郡視学、正覚寺、富豪、十輪寺、町長、浄泉寺、願栄寺、高等小学校長、村長、有為会、照徳青年会、知徳婦人会、大覚寺
観光行動	「旧城址および人丸神社を一覧し、小学校に至りて演説す。」(12・148)「当夕、衝涛館に宿す。風光明媚なり。」(12・148)「午前、高砂松、尾上松および太子寺を一見して加古川に至り乗車し姫路市に移る。」(12・149)「午前、書写山に登り円教寺に詣す。堂宇やや荒廢の相あるも依然として古色を存し、結構壮大なり。」(12・149)「大石神社および花岳寺には四十七士の像および墓あり。」(12・149)「製塩場を一覧し、帰りて午餐の饗応に接す。」(12・149)「余部村字青山教専寺に移る。…門内にみかえりの松あり。横臥十丈、一顧するに足る。」(12・152)

出所：筆者作成

表30 加賀国における全国巡回講演（「加賀国および播丹巡回日記」）

期 間	明治35年4月6日～6月1日
行程・交通	夕、東京発車→大聖寺駅降車→黒崎村・動橋村（加賀市）→串村・木津村（小松市）→大聖寺町（加賀市）→小松町・浅井村・千針村・沖杉村（市）→寺井町→山口村・宮内村（辰口町）→鶴来町→草深村（川北町）→美川町→柏野村・笠間村・出城村・旭村・松任町（松任市）→中条村・種谷村・東英村（津幡町）→高松村（町）→七塚村（町）→津幡町・俱利伽羅村（津幡町）→金川村・河崎村・金石町・二塚村（金沢市）→金沢市→金野村（小松市）→山中村（町）→（兵庫県）三田町（市）→中吉川村（吉川町）→福田村（社町・小野市）→津万村（西脇市）→黒田庄村（町）→中村（町）→松井庄村（加美町）→久下村（山南町）→柏原町→石生村（氷上町）→佐治村（青垣町）→成松村（氷上町）→黒井村（春日町）→福知山町（市）→綾部町（市）→篠山町→汽車にて翌日夕刻帰京
目的・内容	「木津村に移りて開会す。相資講の発起なり。」「美川町に移りて開会す。進徳会の発起なり。」(12・155)「農学校において演説す。校友会の依頼なり。」(12・156)「願浄寺に移りて開会す。村内青年講の発起なり。」(12・157)「常德寺において演説す。軍人団の依頼に応ずるなり。…つぎに師範学校において演説す。石川県教育会の依頼に応ずるなり。」(12・157)「真言宗寺院の依頼に応じて演説す。」(12・158)「柏原中学校において演説す。」(12・159)「常照寺において興郷会の依頼に応じて演説す。」(12・160)「何鹿郡教育会の依頼に応じて演説す。郡長三宅武彦氏、大いに尽力あり。」(12・160)
滞在・宿所	「当夕、白銀屋に宿す。温泉場なり。」(12・153)「当夕、粟津嘉宮楼に宿す。温泉場なり。」(12・154)「宿所は浅井旅館なり。」(12・154)「宿所称名寺なり。」(12・154)「宿所は辰口松崎館なり。」(12・154)「所は宮本長三郎氏宅にして」(12・155)「宿所は竹仲なり。」(12・155)「宿所旅館なり。」(12・156)「宿所池端清十郎氏宅なり。」(12・156)「宿所は浅田屋旅館なり。」(12・158)「宿所正覚寺なり。」(12・159)「宿所足立徳吉氏宅なり。」(12・160)「宿所は亀嘉楼なり。」(12・160)
交流・交遊	愛国護法教会、称名寺、住職、篠生寺、村長、大聖寺、沖仏教青年会、宝海寺、顕徳会、仏教青年会、明楽寺、校友会、農学校、本福寺、光専寺、村内青年講、本竜寺、軍人団、石川県教育会、曹洞寺院組合、郡書記、郡視学、町内有志、宗蓮寺、本館出身者、関西東洋哲学会

観光行動	「午後、演説後万松園内を遊覧し、当夕、白銀屋に宿す。」(12・153)「篠生寺に移りて開会す。蓮師の旧蹟なり。」(12・153)「当夕、粟津嘉宮楼に宿す。温泉場なり。当夕、降雪を見る。」(12・154)「辰口は鉱泉場なり。」(12・154)「午前、海浜を遊歩し、湊町某氏の別亭に少憩し、出雲路善興翁に邂逅す。」(12・155)「その辺り桃林多し。」(12・156)「午前、金野を発し大聖寺より鉄道馬車にて山中村に移る。加州第一の温泉場なり。宿所は三谷伝次郎氏別荘にして、会場は灯明寺なり。・・・演説後、当所の名勝を巡見す。」(12・158)「京都に一泊す。」(12・158)「当夕、京都に至りて宿す。」(12・160)
-------------	---

出所：筆者作成

表31 福井県における全国巡回講演（「福井県巡回日記」）

期 間	明治35年6月19日～9月3日
行程・交通	夕、新橋発車→福井市→西藤島村（福井市）→丸岡町→金津町→吉崎村（金津町・芦原町）→芦原村（町）→三国町→鷓村・大安寺村・鷹巣村・国見村（福井市）→越廼村→四ヶ浦村（越前町）→織田村（町）→糸生村（朝日町）→三方村（清水町）→西田中村（朝日町）「未明、西田中を発し、午前五時鯖江発にて即日帰京す。」(12・164)「十二日より十四日まで在京。十四日夕六時、新橋発車」(12・164)・・・(翌十五日、午前十時、武生町着)→武生町（市）→鯖江町・河和田村（市）→栗田部村（今立町）→上池田村（池田町）→下味見村（美山町）→大野町（市）→勝山町（市）→国高村（武生市）→敦賀町（市）→耳村（美浜町）→八村（三方町）→瓜生村・三宅村（上中町）→小浜町・今富村（市）→本郷村（大飯町）→「午後六時、和船に乗じて小浜に移り、当夜の汽船にて翌朝敦賀に着し、富貴楼に一憩して午後の汽車に乗り込み、その翌三日午前八時帰京せり。」(12・168)
目的・内容	「福井中学校において演説す。」(12・161)「坂本知事の宅を訪い、高等女学校に移りて演説す。・・・つぎに仏教中学において演説す。」(12・161)「午後、小学校において開会す。」(12・162)「午後、称名寺において開会す。」(12・165)「最勝寺に移り、午後開会す。演説後、善道寺において茶和会あり。ともに盛会なり。その発起は各宗和合会、婦人協会、愛国護法団等の各団体なり。」(12・165～166)「午前、雲浜俱樂部において教育会のための演説す。」(12・168)
滞在・宿所	「宿所佐佐枝下町恵美竜円氏宅なり。」(12・161)「宿所かぎ屋なり。」(12・162)「会場ならびに宿所は大谷派別院なり。」(12・162)「富豪青木喬氏の宅に休養」(12・163)「宿寺明正寺なり。」(12・164)「宿所および会場は当地の富豪飯田広助氏宅なり。」(12・165)「宿坊善導寺なり。」(12・165)
交流・交遊	福井県本館同窓会、福井中学校長・教諭、師範学校、知事、村長、村内教育会、助役、郡長、浄勝寺、専徳寺、西楽寺、広善寺、河和田青年会、婦人協会、愛国護法団、本館出身者、浄願寺、興善寺、教育会、各宗仏教和合会、雲浜俱樂部、郡長、視学、村長
観光行動	「大谷派別院および藤島神社を巡拝し、五岳楼に一憩して帰宿す。」(12・161)「演説後、真宗中興大師の遺跡をたずね敬慕の情にたへず。山上風景ことに佳なり。本派別院書院および願栄寺肉付面を拝観す。」(12・162)「海上を渡り亀島を巡り・・・海上眺望すこぶるよし。・・・歩行して山路を跋涉し」(12・163)「午前十時、小舟に駕し海上四里、いはゆる越前岬を巡りて四ヶ浦村に着す。風穏晴、風景絶佳、舟中知らず快哉と呼ばしむ。」(12・163)「午前、天徳寺水森に一憩す。ここに湧出せる霊泉、清冽氷のごとし。」(12・167)

出所：筆者作成

表32 甲州における全国巡回講演（「甲州巡回記」）

期 間	明治37年1月15日～31日
行程・交通	朝、東京出発→甲府着→葦崎町（市）→増穂村（町）→鏡中条村（若草町）→英村（石和町・御坂町）→七里村（塩山市）→大門町→西島村（中富町）→鰍沢町→日下部村（山梨市）→広里村（大月市）→谷村町（都留市）→瑞穂村（富士吉田市）→大原村（大月市）
目的・内容	「普通学校において講演。」(12・169)「葦崎町に移りて開会す。曹洞宗組合寺院の発起なり。」(12・169)「長遠寺にて開会す。」(12・169)「塩山向岳寺にて開会す。」(12・169)「大月中学分校にて講演す。」(12・170)「猿橋にて開会す。北都留仏教有志会の発起なり。」(12・170)
滞在・宿所	「旅館は魚町松亭なり。当夜、瑞泉寺において茶話会あり。」(12・169)「宿所は渡辺信氏の宅なり。」(12・169～170)「当夜、寒風をおかして甲府に帰宿す。」(12・170)
交流・交遊	曹洞宗組合寺院、青柳寺、本館出身者、長遠寺、正法寺、塩山向岳寺、靈光会、経王寺、福源寺
観光行動	記載なし

出所：筆者作成

表33 関西における全国巡回講演（「関西紀行」）「大和論」付記

期 間	明治38年7月16日～明治39年1月31日
行程・交通	熱海温泉滞在→久努西村（袋井市）見附町（磐田市）→「山陽鉄車に投じて」(12・172)馬関（下関市）→唐津（市）→有田（町）→伊万里（市）→佐世保（市）→帰京→茨城県猿島郡境町「夜十一時帰宅す。・・・京北幼稚園始業式に列し、即日更に旅装を整え、汽船に投じて茨城県真言宗発起の（境町の）講習会に出席す。」(12・181)→古河（市）→帰京「夜行汽車にて帰京す。」(12・182)
目的・内容	「熱海を去り、久努西村に移る。・・・仏教哲学の講習をなさんがためなり。」(12・171)「馬関の講習会に出席す。」(12・172)「哲学館同窓会の開催あり。・・・当地（下関市）には哲学館館賓、館友また多し」(12・173)「会場は教法寺にして、開会は各宗連合会の主唱にかかれり。」(12・180)「京北幼稚園始業式に列し・・・茨城県真言宗発起の（境町の）講習会に出席す。」(12・181)「講習会場は猿島郡境町吉祥院なり。昨年、筑波山下の講習会に列せしことあり。」(12・182)「古河町尊勝院において開会、夜行汽車にて帰京す。」(12・182)
滞在・宿所	「微恙ありて閑地に静養を試みんと欲し・・・豆州熱海の温泉に浴す。滞留、週余に及ぶ。」(12・170～171)「宿坊は光明寺なり。」(12・172)肥前の地に入り、唐津第一の宿楼に入る(12・176)。「旅館博多屋を去り」(12・177)「宿所は辻勝蔵氏の宅なり。」(12・179)「宿舎の名を今福といふを聞き」(12・180)「旅館は鶴谷なり。」(12・180)
交流・交遊	「奥村円心師の来訪あるに会す。師の令妹を奥村五百子といひ、女傑の称あり。」(12・175)「当地（伊万里市）病院長古川俊氏の宅に遊び、観月の宴に列す。満天晴れ渡りて一輪空間に懸かる。その趣、実に妙のまた妙なるを覚ゆ。席上一作あり。」(12・177)「薄浄光氏の寺に遊び、二十一夜、医師草場見節氏の別邸に会す。邸は主人六十一歳の祝賀のために設くるものにして、新築まさに成り、眺望すこぶる佳なり。余、席上即吟をとどめて去る。」(12・177)

観光行動	<p>「可睡斎は県下第一の名刹にして、堂宇、伽藍の結構、大いにみるべきものあり。その山内に祭れるものは秋葉山三尺坊なり。・・・庭前に丘山の突起するあり。その風光はあたかも樹色眉間に映じ、山影頭上に落つるがごとき趣あり。」(12・171)「宿坊は光明寺なり。その堂に座して海峡の風景を一瞰すべし。爽快いふべからず。余、一吟あり。」(12・172)「海浜数里にわたりて弓形の松林あり。これを虹の松原と称す。その風景の秀霊なる、須磨、舞子の比にあらず。拙作をもつてその一斑を叙す。」(12・174) (虹の松原の) 風物は人に詩情をおこさせる (12・174)。松は虹のごとく海浜を彩り、それはあたかも東洋のスイスである (12・175)。暑熱のうちに景勝を求めて肥前の地に入り、唐津第一の宿楼に入った (12・176)。「翌朝、霖雨ようやく晴れ、腰岳の高くそびゆるを望み、一吟を試む。」(12・179) 人々は耶馬溪をすぐれたものと称するが、私はむしろ虹の松原の方がさらにすぐれた景勝といとおしんでいる (12・181)。「吉祥院の堂宇廢頽せる状を見て、また一作あり。」(12・182)「途上、熊沢蕃山先生の墓に詣す。」(12・182) 異郷に旅をして、帰り来てまず四聖堂を訪ねる。風光と晴れた月は以前のままにあり、はじめてこれこそわが尽きることない蔵であることを知る (12・183)。</p>
------	--

出所：筆者作成

Inoue Enryō's Tourist Activities as described in his Travel Diary "*Dean's Lecture Tour Diary*"

HORI, Masamichi

Abstract

For Enryō, tourism was, above all, visiting and appreciating scenic places. The beauty of that which he encountered would inspire his writings. In his travels, he often went to famous historic spots and bathed in famous hot springs areas. Furthermore during all of his travels, spanning 3,578 days in total, Enryō made efforts to spend time with people at the places he visited. In his travels he formed a diverse network of people. This gave a depth to his writing that corresponded to the wide range of perspectives and comparative ways of thinking and viewing different situations from his encounters. For each trip he compiled a diary of the experiences he had.

For part of his travels, he embarked on a number of nation-wide lectures. Enryō's lecture tours can be divided into two periods corresponding to two diaries: *The Dean's Lecture Tour Diary* and *South by Boat - North on Horse' Collection*. Enryō published records of his nation-wide lecture tours as concise diaries (Travel Diaries) . They were first included in Philosophy Academy Lecture Transcripts under the title "*The Dean's Lecture Transcripts*." This paper will consider Enryō as a tourist through these travel diaries, with particular attention to *The Dean's Lecture Tour Diary* showing his depth of experience and thinking.

Keywords : Inoue Enryō, Nation-wide Lecture Tour, " Dean's Lecture Tour Diary" , Tourist Activity